

## 北九州市・謹念寺菩薩立像と九州の古代木彫像 —九州の古代彫刻に関する一試論—

末吉武史（福岡市博物館）

北九州市小倉南区にある檜（しきみ）山謹念寺は、瀬戸内海周防灘に面して建つ寺院で白鳳年間の創建を伝える。同寺に伝来した菩薩立像（以下「本像」）は像高九一・九センチ、両肩および台座蓮肉部を含む全体を針葉樹の一材から彫出する一本彫像で、内刳りを施さない古様な構造をもつ。現状では両手肘先を亡失するが両肩側面には脇手を付けた跡があり、当初は千手観音などの多臂像であった可能性がある。その彫刻表現は個性的であり、頭部が大きく胸の下と足元を大きく絞り、上体を反らした独特のプロポーションをもつ。また、髻や着衣の形状、衣文などにも著しい古様が認められ、蓮肉の下部には台座に挿し込むための心棒を本体から共木で彫出していることも特筆される。

本像は昭和五十年代に北九州市による市内文化財調査で確認され、平安時代の作とされてきたが、これまで専門的な立場から詳しい検討がおこなわれたことはなかった。いま改めて本像をとりあげるのは、第一にその彫刻表現や構造に奈良時代の作品、とりわけ唐招提寺木彫群のうち伝衆宝王菩薩像などに通じる古様が認められ、制作年代の検討と彫刻史的な位置づけが必要と思われるからである。そしてまた、本像が示す彫刻表現に周辺の宇佐地域や北部九州に残る古代木彫像との類似も指摘でき、地縁的なつながりの中で九州地方の木彫像の発生と展開の様相を窺う試金石になり得ると考えるからである。

これまでの九州地方の彫刻を対象とした研究では、奈良時代以前は金銅仏や塑像が造像の主流であり、木彫像の存在はほとんど想定されてこなかった。こうした見方は都鄙間における文化伝播の問題、あるいは太宰府・観世音寺や宇佐・弥勒寺などに残る遺物や文献史料に鑑みてのことであり、今でも大きな枠組みとしては認められよう。しかし近年の彫刻史における成果、とりわけ樹種分析の結果を踏まえた研究が、日本における木彫像の発生についての考え方に大きな進展をもたらしたことは記憶に新しく、最近では畿内から遠く離れた地域でも奈良時代に遡るかと思われる木彫像が報告される事例が増えている。また、都鄙間を往来した官大寺僧の山林修業と在地の神祇信仰との関わりの中から木彫像の出現を説明しようとする近年の宗教史的アプローチも、九州における木彫像出現の様相を考えるうえで魅力的な視点と思われる。

発表では以上の認識にもとづき、まず本像の概要を紹介し、制作年代について検討をおこなう。次に宇佐などに残る作品との比較から地域的な繋がりの中での位置づけをおこない、さらに福岡鞍手町・長谷寺十一面観音立像や福岡市・荘厳寺聖観音立像、同小田観音堂千手観音立像といった平安期の北部九州に展開する一連の一本彫菩薩像との関係についても言及する。以上の作業を通じて九州の古代木彫像が成立する様相の一端を明らかにしたい。